

特254

493

人  
間  
の  
詩



始





特254  
493



秋風

少

少

少

少

少

少

一





名古屋の東北品野町沓掛の定光寺は臨濟宗妙心寺派の古刹で、尾張藩祖徳川義直卿の廟墓のあるところである。建武三年、平心處齋、其弟子聖眼と共に此地に來り、郷人の歸依を受けて山を開き、曆應元年一字を建て、無爲と名づけ、同四年庫院、方丈等を建立し、應夢山定光寺と稱した。康永二年雲堂を、貞和四年佛殿を營み、次第に七堂伽藍が完備したが、其後一時衰頹した。然るに慶安三年に喝堂が住して以來妙心寺派となつた。これより先き、元和年中義直卿が狩獵の途、此山に上つて其景勝を愛し、命じて當寺を復興せしめた。慶安三年義直が江戸に薨するや遺命によつて其遺骸を當寺に葬り、山頭に廟を營んだ。墓は寺後の山上に存し、封土の上に陳元資の書にかゝる支那式の位牌形の墓碑が建てられてある。そして其墓側の一段低き處には殉死した家臣五名と其の臣四名の墓石がある。

松浦先生は御來講の時態々定光寺に殉死の家臣の墓を訪ねられた。一死以て君公に殉じたその赤誠をいやが上にも貴く憶はれたからである。この一首はその時の御感慨の一端で、寂光の淨土を念ふにふさはしく一面「人間の詩」を憧憬省慮すべく、かつは先生の御風格を偲ぶよすかともならんかと存じ、特に冠題に掲げること致しました。(碧記)

## 人間の詩

大正大學教授 松浦一先生

明治三十四年五月十三日の日附で、その子息並に親戚の人達の名で、遠城謙道といふ人の死亡廣告が新聞「萬朝報」に出て居りましたのを、私は其時其新聞で見ました。其廣告と並んで、同じ日附で、井伊家囑托葬儀掛の名で、三十四人の名がずらつと出て居りました。其處に書いてありました文句は、

東京府下世田ヶ谷豪徳寺遠城謙道師は宗觀公の墓側に結廬し至誠淨掃四十餘年一日の如くなりしが遂に病を以て本月十二日午前五時三十分遷化



致され井伊家に於て葬儀を營まれ右事務を吾輩へ囑托せられたるに付同人知音の道俗諸君へ謹告致候 云々

といふのであります。宗觀公といふのは萬延元年三月三日櫻田門外で水戸の浪士の爲に殺害された井伊掃部頭のこととあります。其死亡廣告と共に其新聞には二日間に亘つて、「四十年間井伊直弼の墓を守りし義僧」といふ題で次の文が出て居りました。

幕末の大立物井伊掃部頭が櫻田門外の雪と消え去りしの際報一たび本國江州彦根に到るや、其身は微賤の足輕たるを顧みず直ちに家を棄て妻子を棄て、江戸に出て、芝の増上寺に髪を削りて圓頂黒衣の姿に至誠を現はし亡き殿様の墓守となつて一生を送らんことを乞ひしを其の赤心主家の容る、處となりて、聽て世田ヶ谷村豪徳寺なる直弼の墓側に庵を結び四十年間一日の如く生ける人に事ふると同じく恭敬を盡し灑掃の勞を取りし義烈の奇僧遠城謙道(八十)は此程老衰の爲め目出度く大往生を遂けたり此

僧が癡髮以來四十年間の歴史は終始一貫毫末の汚點を帶ばざる白紙を綴りたるのみ餘りに清淨に過ぎて餘りに平和に過ぎて波瀾に乏しきの憾みはあれどしかも其の日常の行爲全然俗を脱して太古の民に似たるの處讀者をして無意味なる奇人傳を讀むに勝さること萬萬なるの興味を感ぜしめん、幽寂なる豪徳寺の境内に於いて井伊直弼が墓碑と共に長く昔を問ふの人に感慨を催ほせしむべきは謙道が住み残せし寺後の庵室なり始めは直弼の建築せしものにて數寄を凝らせし茶室作りの離れ座敷なりしを一たび念を浮世の名聞利慾に絶ちし此の僧の住居となりてよりは壁落ち疊破れても修覆するの意なく立てば蜘蛛の絲に頭を縛られ坐れば餌を索むるの蟻が膝に這ひ上がると云ふ始末なるも平然として知らざるもの、如く身は鼠色に汚れし白衣を纏ひて其の間に起臥し井伊家舊臣の誰彼より贈り與へし半紙に筆を弄びて我流の疎畫を繪くことを此上なき樂事となし菜を食ひ粥を啜ることの外更に口腹を知らざりしと云ふ、此僧の生涯は



二個の牴觸せる極端を表せり即ち自己の生活をば極めて無性に出來得る限り不潔ならしむると正反對に、主君の墓場をば極めて精勵に出來得る限り清淨ならしめ四邊に一葉の塵を止むるを以て自己の大罪となせり、謙道には一年幾回か殆んど手の舞ひ足の踏む處を覺えざる非常の喜びありそは舊臣が直弼の墓に詣て來れるの時にて彼は餘りの喜びにしばしは箒を手にして墓を繞り歩き「これはく」と平生の口癖を云ひ乍ら其人が參拜の終るを待ちて有無を云はせず我が庵室に引連れ行き急ぎ茶飯を炊き香の物を取り添へて侑むるに其不潔さ不味さ箒を取るに堪へねどさりとて折角の好意を無にされもせず何れもこれには弱り果てしとぞ、取別け井伊家に關係のなき學生或は外國人等が此幕末の偉人を弔ふべく來りし時は謙道の滿悅一入にて亡君の爲めに眞知己を得たりと嬉し涙に咽ぶの有様此僧に取つては爵位にも金錢にも換へ難き忝けなさなるべし斯る來訪者に對しては茶飯の馳走は愚かの事學生などなれば強ひて止めて一泊せ

しめ夜と共に昔を語り明かし翌くる日辭して歸る折には其人の有難迷惑にも頓着せず茶飯の冷飯を自分の頭程の握飯となし土産の積りにて持歸らしむる習はしなりし之を緣故として外國人にも心易き者を生じ、新茶、麥こがし、半紙に繪きたる自作の疎畫などを時々の贈物として却つて先方を困らすこと多かりしと

井伊家及び舊臣の重立ちたる者共は謙道が比類なき義烈の行ひに感激して何がな報酬をと協議したれど金も入らず譽れも入らず美服を求めず美食を欲せざる此僧に對しては別に報酬の道とてなければ是非なく國に残せし其子の兵造を引き立て、勉學せしむること、なし當人の希望に任せて醫學を修業せしめしに義務心強き父の魂を遺傳したる兵造はたゞただ此恩遇を空うせまじとの一心より首尾好く大學迄も卒業して醫學士の肩書を有する身となり今にては日本橋區數寄屋町九番地に開業醫の表札を打ち相應に門戸を張りつ、あり斯る次第なれば謙道にして若し普通の



老人の如く安逸を求めんと欲せば悴に養はれて樂隱居の身となり得るは勿論の事、左なくとも井伊家及び舊臣等の仕送りを受けて充分豊に生活し得らるべき身なるに此僧の求むるところは唯主君の墓を訪ふ人の多からんこと即ち一人にても亡君の知己を多く得んことのみにて此外に毫末の慾もなかりし、されば一昨年中粥を煮るの火を失して草庵を烏有に歸せしめ脱然として本來無一物の姿に歸せし折さへ聊か驚くの色なく其後井伊家及び舊臣の重立ちたる者共より淨財を喜捨して草庵を再建せしも例の無性にて忽ち又蜘蛛や蟻の巢窟となし以前に變らぬ住み荒せし有様となり食器や經卷や紙筆や秩序なく取り散らされたる間に坐して例の我流の疎畫を繪き俳句とも狂句とも附かぬ怪しき十七文字を鐵釘流の筆法にて其上に題し獨自ら樂みとなせり、繪く處は多く自己の肖像にて杖を突き腰を曲けて道を行く處、踏臼にて米を舂く處、其他瓜、茄子等の野菜物、茶摘女、農夫が耕作の圖などを好んで筆端に捉へしが如し、もとより畫法に拘らぬ勝

手な描き方に地口燈籠に用ふるが如き淡彩を施し其拙劣きことは云ふ迄もなければ、此僧の氣性を現はして一種蕭散曠達の趣あるを愛する者少なからず左なくも此僧の篤行に感ずる餘り其筆跡迄も珍重して絹地に揮灑せしめ立派に表装して床の間に掛け置く者さへある由なり、謙道は時あつて飄然として寺門を出て去る事あり其時の出立如何にとなれば例の鼠色に汚れたる白衣に赤く剝けたる墨染の布法衣を重ね普通に優れし大男が海老の如く腰の曲りたるなれば顔のみ甚だ大きく見え其赤黒き色眞圓なる凸眼、大きく切れたるへの字形の口等一つとして異様ならぬはな、く確に五百羅漢の中にある顔なりと云へりしかして其尋ね行く先は井伊家舊臣の心易き人々の家にて眼中に尊卑の別なき此僧は誰に向つても一様のゾンザイなる上方言葉を遣ひ何處へ行きて我が草庵に在ると同じく少しも遠慮する處なし、されども昔氣質の義理堅く一飯の齋食を供せられ一宿の坐禪の膝を容れられし家には必らず例の半紙に繪きたる疎畫及



び時々、贈物をなすを忘れざりし、其贈物とて別段金の掛るものにあらず。此僧の徳に懐く近傍の農民より贈り來りし新茶、麥こがし等を手製の紙袋に極少量づゝ分け入れ袋の上にも茶摘、麥荊等の圖を畫き如何なる爵位官職ある人の家にも臆面なく之を配り歩くを例とせしとぞ、謙道が後半世四十年の歴史中傳ふべきの逸話少なからざれども詳細に之を記すは他日の業に譲り此處にては遠城謙道なる義僧が確に記憶すべき無名の眞人物なることを讀者に告置に止むべし。

私は此記事を見て始めて遠城謙道師の名を知り、其人柄に非常に興味を覺えました。明治三十四年の新聞——其新聞紙の此記事の切抜は今日までも私の本箱の抽斗に大切にしまつて置かれたものでありました。今「人間の詩」といふ題で私の思ふ事を述べてみようと思ひました時、私の心頭に浮び來つたものは此記事で想像してゐた謙道師のことでした。私は師の事蹟とその風韻とを尋ね求めて、此頃のこととであります。薄の道に秋をしのんで世田ヶ谷の豪徳寺に

その跡を訪ねました。木立も高く聳え立つ廣々として閑寂な井伊家の墓地の中にあつて、宗觀院殿云々とある法名の刻まれた主君掃部頭の墓碑の直後に徳應謙道首座塔と刻まれてある墓碑こそは謙道師の生ける姿を見るやうなその奥津城のしるしとは知られました。墓の位置そのまゝが、其形そのまゝが、無聲の詩を爲してゐます。

其墓所に向つて右側、今は空地となつて居ります處に謙道師の庵があつたといふことです。其庵は今はお寺の庭の片隅に、元の庵の前にあつた。「此庵に住こそ無二の淨土なれ」の句碑と共に、移されて居ります。其空地の側、墓所への道に面して、明治三十四年十二月の日附、谷鐵臣氏の撰文といふこととて謙道師遺蹟の碑があります。其れは誠に要を得た文でありますので、其文中から師の事蹟を記してゐる主要なる處を讀んでみます。

師、名保教遠城氏。彦根藩、微臣也。性樸忠勇、于敢爲、讀書略通大義、又善銃。當藩主宗觀公遭難於櫻田、今公襲封、幕府屢有恩命。既而免其京師、守



護、還、納蒲生神崎二郡地、師慷慨誓以死、白君冤、潛行至老中井上正直、  
邸、出書哀訴、將自刃、井上氏馳使報狀、藩邸、藩譴師專恣、護送彦根命、  
謹慎、幕府追責先公罪、更削封十萬石、爾後國家多難、論者多歸咎於先  
公、師憂憤弗能措、乃削髮稱謙道、遂投先公塋城世田谷豪德寺、今公嘉  
其志節、給二口糧、移先公遺愛茶室於墓門側、而居之、師起臥其中、  
旦夕掃墓、事死如事生者三十七年弗懈、今茲五月十二日寂、享年七十  
九、公悼惜賜賻准家人葬、特命瘞於先公墓側、會葬者凡三千人、有感其  
志而泣者、

之れを見ますと、前に引いた新聞の記事中に誤つてゐる點のあることも分つて來ます。私はもつとくはしく謙道師の正確な事蹟や逸話を知りたいと思ひまして、日本橋通二丁目に七十四歳で今も脚氣の醫療をして居られる師の子息遠城兵造氏を訪ねました。さうして其事は師の歿した翌年明治三十五年四月に發行になつた佐成源五郎といふ人の編まれた「遠城謙道傳」といふ小冊中に

盡してゐるといふことを聞きまして、其れを借覽してその詳細を知ることが出來ました。私は今その中から謙道師一生の折目の中で最も重要となるべき處の數節を引用して、私の述べようと思ふ「人間の詩」を其處から現してみたいと思ふのであります。

碑文には「幕府屢恩命あり、既にしてその京師の守護を免じ、蒲生神崎二郡の地を還納せしむ、師慷慨誓つて死を以て君の冤を白にせんとし、潛かに行いて老中井上正直の邸に至り」とありましたが、その死を決して家を出ようとした時の有様。

十月二十八日師は妻繁子を別室に呼び容を正し諭して曰く今改めて卿に告ぐるの一事あり既に卿の知る如く先主の冤枉、二郡の上知は一藩の憤慨する所我微賤なりと雖亦藩臣の末にあり祖先以來俸祿を忝くして以て今日あるは皆主恩にあらずと謂ふへからず是時に當て徒らに素餐坐視す



るは深く耻る所我身命を抛て幕府に抗訴し以て萬分に報せんと欲す而して既に吉太の先んする所となる今に及て復疑すへからす我今夜を以て將さに程を發し東下せんとす今や幕廷の有司吾藩を視ること讎敵の如し我其中に投し上を犯して抗訴す他日嚴譴を蒙るは必せり我固より生還の心なし我去るの後能く家事を整理し兒女を教養し苟も世人の哂を招くと勿れと繁子之れを聞て且つ驚き且つ泣く須臾にして涙を揮て曰く妾武臣の家に生れ武臣の妻となる其大節に臨んで復何をか言はん幸に後事を顧慮すること勿れと師は大に悦んで命して酒肴を具せしめ訣飲して夜に入り匆々結束して竊に彦根を脱し江戸に赴く發するに臨んで一詩を書して曰く

一男三女未成人

懔軻如卿不遇身

大義今將殉邦國

勿忘家世是忠臣

この後に尙次の佛語と歌とが載せてあります。

生死事大 無常迅速

夜もすから生死のことに骨をりて

あけてみたらは十五夜の月

「生死事大 無常迅速」の句は、「生死事大 無常迅速 各宜惺覺 謹勿放逸」の上二句であります。生死の事柄は大變に大きな事である。而も無常は時の間に來るのである。此世に常といふものはない。此佛語は此時の遠城氏には今更のやうに力となつた。さうして「夜もすがら」のあの歌。生きるとか死ぬとかいふ問題で一晩中骨を折つていろく考へてみたり何かしたけれども、偕それは一晩中の夜の話を夜が明けてからつと明るくなつてみると、何んの事はない十五夜の月だ。十五夜の、あのまんまるい曇りのない月、あれだ。――「よもすがら生死のことに骨折りに明けてみたらは十五夜の月」。この心を力にしていよいよ江戸に出たのであります。

何と申しても脆く弱いこの人間が、それぐの持つ最上の力を振ひ起して、其



事の大小は問はず、命懸けの事をしようとし、ます時には、自分のからだ全體を投げかけて安らかな大きな大黒柱となるものがその心になければならない。宗教的の力といふものが其處に必ず見えるのです。安心立命の何かの力が必ず其處に見えるのです。其力が餘人の魂にそのまゝ響く。其威力に感應して人の魂は動き、喜び、共に鳴る。握れば碎けて微塵となる一枚の枯葉からさへ、秋の光は吾々の生命の中に流れて来て、物寂びた光の中に吾々の魂は動き、喜び、共に鳴る。何よりも其處に動く其力が尊い。何よりも其處に光るその大いなる光が尊い。さうして之れを自然に對して感ずる時には自然の詩といふものが現れ、之れを人間に感ずる時には人間の詩が現れて来る。さうして又この人間の詩が言葉を通して漏れて来る時、其言葉の生命の聲は吾々の魂が動き、喜び、共に鳴る微妙な響を響かせる。遠城氏の無造作な詩歌を見て、また之れを三誦して、飽くことのない良いものを感じることの出来、ますのは、此處から發する爲であります。

「十五夜の月」を見ることの出来た氏は何處で心の窓を明けたか。それは彦根の井伊家の菩提所清涼寺の住持仙英和尚といふえらい和尚さんであつたといふ。氏は此人に従つて禪學を修めたのでありました。「よもすがら生死のことに骨折りに明けてみたらば十五夜の月」——十五夜の月は安らかです。

次に「傳」の中から遠城氏がいよく出家する處を讀んでみます。

元治元年長藩の兵藩主の冤を訴んと聲言し京師に入る時に吾藩の一隊東福寺に屯す師は作事方を以て之に従ひ工事及糧食の事を擔任す陣を他所に遷すに及んで境内多く穢塵を残留す一士あり風貌朴實、留て之を掃洒し獨語して曰く此の如き名刹を汚すは甚た心なき業なりと寺僧其凡庸の士にあらざるを見て之を藩の使番某に語る後其人を物色して果して師なるを知り聞もの其篤實に感せざるはなし亂熄の後家に歸り熟々主家の否運を思ひ且つ自己の志を貫徹すること能はず而して世は益先主の非を責



め甚しきに至つては姦賊を以て呼ものあるに至る師は之を聞く毎に悲憤に堪へず死するに機なく訴ふるに地なきの悲境に沈淪するを慨き寧ろ妻子を棄て、一生を先主の掃墓に委し以て舊恩の萬一に報せんとの念を發し深く交はる所の天寧寺の僧某に謀る某は師の志を知るを以て敢て之を止めず却て慇懃の意を表す師は稍之を心に決し更に外村程輔に謀る程輔は其熱誠に感歎すと雖切に之を諫止して曰く子の志節は毎に我輩の歎服する所なり然れども一朝厭世の念に制せられ身を縮林の中に投するときは他日悔るも復奚そ及はん姑く忍んで時機の至るを待つに如かすと師は躊躇遷延殆んと一年を経過したるも時勢は益自己の心裏と背馳し竟に世の頼むへからざるを感じ斷然初志を貫ぬかんと決心す此頃田中榮<sup>號す</sup>は儒を以て藩に召さる師は曾て之に師事することあり一日其祝賀を致さんと飄然家を出て、日を経て歸らす家人怪んで親戚朋友の家に就て搜索すれとも其之く所を知らず是日師は出て、芹坡の家に祝詞を述へ歸途一書

を裁し澗谷驢太郎に贈りて其志を告げ直に清涼寺に向ふ書尾添ふるに詩及一休の偈を以てす其詩に曰く

力耕不及一農翁、  
報効多年豈有功、  
寧投禪門護冥福、  
朝昏掃墓致微衷、

一休の偈に曰く

茫々三十年、  
淡々三十年、  
茫々淡々六十年、

末期脱<sup>レ</sup>糞<sup>上</sup>梵<sup>天</sup>。

自分のやうな者は幾ら骨を折つて田畑を耕してみたところで、一人の百姓のお爺さんにもかなはない。御恩返しに働いて長年やつてみたところで、別に何の手柄もない。それならばいつその事、禪僧となつて亡君の冥福を護り、朝夕御墓を掃き浄めて寸志を盡した方がましてあらう。——我れと我が身にその無力さが沁々と感ぜられ、我が我執は粉碎され、限りなき光の前に樞<sup>こ</sup>の落ちた小屋のやうに、寂しさを極め其故に又明るさに目覺めた者は、遂に一休の偈の中の人と



なる。「傳」の中にある「茫々三十年」の偈は、私の見た「一休咄」の中にあつた偈文でもつて言つてみれば、

朦々而三十年。 淡々而三十年。 朦々淡々六十年。

末後歸<sup>ミツテ</sup>糞<sup>クソ</sup>捧<sup>テ</sup>梵<sup>ツ</sup>天<sup>ニ</sup>。

言葉に少々相違はあつても、意味は勿論同じ事です。——何が何やら分らずにほんやりとして三十年、あつさり過ぎた三十年、その六十年の一生の終は此身そのまゝに糞をして佛様に差上げる、即身成佛、あなかしこ。

此處でもまた十五夜の月の心が窺はれます。さうして此月のさす處には何處でも人間の詩があります。人間が月の人となる時に、人生が月に還元される時に、人間の詩が生れて來るのです。人間まるごとが詩となつて出るのです。

「傳」の文の續きは次のやうになつてゐます。

慶應元年二月朔夕刻清涼寺(寺は井伊氏の香華院にして歴代の墓あり)の中門に到り自から副刀を抜き髻を斷ち住持俊龍に面會を求め其志を告げて徒弟たらんことを請ふ俊

龍は師の決心面に溢るゝを見て深く其志を諒すと雖當時の藩規凡そ仕籍にあるもの許可なくして恣に僧となることを許さざるを以て遽に之に應せず寺僧をして竊に藩廳に赴き其狀を具申せしむ藩廳は師の專恣なるを譴て二百日の謹慎を命す師は本志再び頓挫して悒々樂ます其年八月五日譴解て同時に親戚附添用召あり出つれば則ち隱居を命せらる其達文の旨意に曰く「其方儀御役中をも憚からず勝手を働き不埒に付隱居申付」師は此命を受るや家に歸らず途中詐て附添人に別れ再び清涼寺に抵り俊龍に就て前請を申へ切に其徒弟たらんことを請ふ俊龍遂に之を許し度して僧と爲し名を謙道と命す是に於て綠鬘大髻の丈夫忽ち禪衣の一圓相に變ず而して家人は毫も之を知らず明日寺僕は兩刀羽織袴等を遠城氏に送還し昨日剃髮遁世したるの旨を告ぐ舉家大に驚く時に家に十二歳の女子を年長として六人の子女あり妻繁子は妊娠の身たり師は藩規を犯すを以て家祿を沒收せられ兵造は年纔に七歳なるを以て相續を聽されず茲に至て一



家殆んと爲す所を知らず悲慘焉より甚しきは莫し妻は蒼皇馳て清涼寺に到り師に面せんことを請ふも肯せず再三請へとも遂に卻けて可かず姉夫田中孫三郎兵造を伴ひて寺に到り師に面することを得たり師は孫三郎を見て曰く祖先以來久しく鴻恩を蒙り未だ涓滴の報効を致さず今や先主の爲めに冥福を祈り其墳墓を掃ひ以て一生を終へんと欲す是我微衷なり家人等能く我志を體し必ず不貞の所爲あるへからず兄も亦幸に之を視よ孫三郎師を詰て曰く足下の志固より善し然れとも家に寸祿なく子女六人は年尙幼なり且つ令室の分婉も亦近きにあらんとは今後一家の保育を如何せんとするか師大息して曰く天道若し是ならば一家饑渴に至ることなかるへし天若し我を棄ては家人は乞食餓死其爲す所に任すへしと辭色頗る決す孫三郎は其回すへからざるを見て復言ふ所なし悵然として去る兵造は側に在て未だ其真相を解せずと雖其意外なるに驚き唯歎歎するのみ時に師は年四十三嗚呼書して茲に至り如何なる木石心腸と雖誰か一掬の熱

涙なからんや

彦根大雲寺の住持に一山と云ふものあり師か妻子の愛を抛て豪徳蘭若に入り一生を先主の掃墓に奉し發程將に近きにあらんとするを聞て深く其志節に感じ衣鉢等一切の僧具を擧て之を贈り以て其東行に贖せり是に於て師は菅笠麻布一箇の打包僧となり八月二十三日清涼寺を辭し山驛水程遙に東を指て程に上る途中の歌に曰く

西行のまねして家を出てみれば

こゝろにかゝる一物もなし

事は僅かに一私事のやうにも見えませう。けれども一人一家の中に起つた此非常事を焦點として燃え上る魂の大いなる焔天地の境を焼き盡して神人共に相通する一路を開く大いなる炎は、「天道若し是ならば一家饑渴に至ることなかるべし天若し我を棄てば家人は乞食餓死其爲す所に任すべし」の天を信じ天を頼むその畏れなき信の一念の處で燃える。一茶の「ともかくもあなた



任せの年の暮」の自我を無にして投げ出し佛に任すその一念の處で燃える。謙道師はこの信の臺うたなに載せて一家を佛の御手に託した。「佛心とは大慈悲是れなり」——その大慈悲の許に託した。此處に云ふ天道とは大慈悲の佛心とも言ひ得るものでありませうから。かくして一人一家の一私事と見えますもの、中からして其處に流れる涙の裡に矛盾の多い人情の縫れの中に吾々は此處にも復た「十五夜の月」の出を見るのであります。それは人間界を破り來つて靜かに澄む天の月です。その下には、その光で明らかに見える人間の涙もありません。寂しいもの、姿も見えます。けれども此月の光の中では、凡てが淨らかに現れます。涙の中に、寂しさの中に、人間の詩は淨らかに現れます。

謙道師が先公の墓守となつてその墓地の門の側に幽居して居りました時の有様は、「傳」の次の文中に奥床しく見えて居ります。

師は常に良寛か「焼くだけは風のもてくる落葉かな」の俳句を愛誦する

を以て谷鐵臣爲めに其室に榜して燒葉山房と曰ふ且つ一詩を寄て曰く

守寂蒲團坐

枯形似鶴癯

山風吹木葉

片々落茶爐

同藩林立守夙に師の清節を欣慕し贈遺音問常に絶へず東遊する毎に必ず往て起居を問ふ後一碑を住庵の側に建て俳歌を刻して曰く

此庵に住むこそ無二の淨土なれ

是より此庵室の中に起臥し先主自筆の詠歌を装して之を壁間に掲げ筆硯の外座上一物を置かす掃墓諷經死に仕ふること生に仕ふるか如し

此文中にあります良寛和尚の句といふのは「焚くほどは風がもて来る落葉かな」とあるべきものです。「焼くだけは風のもてくる」といふのを「焚くほどは風がもて来る」といふのと歌ひ比べてみましたならば、矢張後の方でなければ落ち着かぬことを感ずるでありませう。此句は大變に尊い良い句であります。焚くほどの落葉は風がひとりてにフーッと持つて來て置いて行つてくれる、といふので、此句の調子と共に一點の濁り微塵の滞りもない處に、ふつくらと



した軟らかい感じ、物寂びた中の軽い感じ、天と地と、人と自然と、その境をひつばすした明るい感じが溢れて來ます。亡君の宛に泣く其憂悶を焦點として燃え上つた純情の遺る瀬なさに、唯其焦點に全生命を投げ込んで、その餘のものには死んで行つた謙道師の心境には、この枯葉はさながらに我が身の姿と見えたてせう。吹く風に吹かれるまゝに足元に溜る落葉、其落葉の心安さは人の世に死んだ者のみが経験する明るい淨土の氣輕さです。師の口に此句が浮び上つた時、此句も新に生命を得て庵吹く風に吹き送られたこととせう。落葉が人が、人が落葉か、良寛和尚の人間の詩は天地の詩の落葉に觸れて、あの名吟となりました。謙道師の人間の詩は此名吟に融け込んで、その庵を取圍む天地は庵の主と共に詩即淨土を現しました。「此庵に住むこそ無二の淨土なれ」庵の前の此句碑は淨土の門の標であり、又詩の門の標です。又かの谷鐵臣氏の詩「寂を守り蒲團に坐す。枯形鶴の癩たるに似たり。山風木葉を吹き。片々茶爐に落つ。」此閑寂、此清楚、死て洗はれた生の淨さ、又靜けさは此處にまた詩の淨國を人間の

住む處にも示してゐます。

人間の詩と私が云ふ此處に非人情と人情とが微妙に織り交ぜられてゐることにも注意すべきです。今讀みました文の中には、「此庵室の中に起臥し先主自筆の詠歌を裝して之を壁間に掲げ筆硯の外座上一物を置かず掃墓諷經死に仕ふることに生に仕ふるが如し」とありました。人間の詩の淨土には落葉の非人情に浸み透る人情の詩があります。謙道師の場合ではこの人情の詩といふべきものが先主の宛に憤激した心よりして燃え立つた。此焔が凡てを焼いて此處に一箇の僧形を落葉の中に置いたのでした。閑寂、清楚、生の白い光の中に、先主の自筆を壁間に仰ぎ掃墓諷經、生に仕ふる如しといふこの人情の詩のある處、之れが人間の詩の滋味でもありません。

この人情の詩は思はぬ時に思はぬ處で鳴ることさへもありました。「傳」は次に斯ういふ事を語つて居ります。



十一年五月大久保參議刺客の殃に遭ふや師は朝廷贈位贈官の特典あり且つ恩恤優渥なるを見て轉た先主の冤枉未だ世に表白せざるを痛歎し先主の行爲を大久保參議に對照し一篇の建白書を草して太政官に到り之を呈す官受す轉して元老院宮内省に到る又之を斥く是に於て太政大臣及東京府知事等の邸に到り訴ふるも一も省みる所なし師は已むことを得す再ひ宮内省の門に到り稽顙百拜して一たひ之を執奏せられんことを請ふ省吏諭して去らしめんとす師は路上に端坐し固く請て動かす既にして警吏來て師を赤阪分署に拘し百方説諭すれとも師は他意なきを分疏して聽かず警吏乃ち寺僧を召して師を付し其書を併せて退かしむ師は幾回か哀訴の舉に出ると雖一も其志を得ず殆んと狂せんとするに至る後數日友人某此事を聞て其安否を慮り之を庵室に慰問す師は適掃墓に従事し某を見て曰く數日來他出して洒掃を怠る今や其罪を贖ふのみ某出訴の事を問ひ且つ之を慰藉す師笑て答へす箒を停て他事を談し一語も出訴のことに及は

す。

人情の詩は高鳴りして再び一本の箒に歸つた。落葉は依然として落葉です。非人情の詩の中に人情の詩は靜かに融けて、再び落葉に歸るのでした。此落葉は又土に歸る。純情の落葉、義に燃えて灰と化し、焔は白く人間の詩の中に昇る。「傳」はその臨終の有様を此様に記して居ります。

三十四年四月舊彦根藩士民藩祖直政公三百年祭を彦根に舉行す直憲公も亦臨む師は公に従て之に赴き錫を清涼寺に駐め其祭典に會す是より先き師は微恙あり人其歸國を止むるものあるも聽かず常に豫言して曰く五月の交、是吾死期ならんと四月十日東歸し爾來別に病あるにあらず荏苒老衰に陥り伏枕數日兵造側に侍し屢診脈して切に藥を勸むれとも肯んせず時に傍人に扶けられて跌坐結跏し病革るに及て尙ほ先主を禮拜すると平日に異ならず五月十一日午前筆硯を呼び畫數紙を造り又枕に就く傍人殘喘の久しからざるを慮り其妻及女を迎へて看護せしめんと謀る師聞



て曰く妻子枕畔に侍する其煩に堪へず今に至て復何の用かあらん十二日  
午前五時溘然として寂す享年七十有九

枯葉は既に枝を離れた。落葉は此世に死んでゐる。枯葉に藥の用はなく、妻  
子の情は唯苦しい。無情は無情のまゝながら、死の明鏡に曇はなく、落葉は遂に  
淨く明るい。師の最後の有様は「傳」の別の處に又此様に記してあります。

師は平生身體強健にして病に臥すること少なし假令微恙あるも醫藥を  
服せず床蓐に就かず唯坐禪を修するのみ老て益々鏗たり腰を弓にして杖  
に倚り宛然乃字の形を爲す然れども健脚少しくも衰へす能く數里の道を  
往復し毫も疲倦の色を見ず一旦病に臥するや看護人某始終側に侍す其彌  
留に臨て右手を搖して之を招くもの、如し某就て之を問ふ是時聲既に微  
なり命するに先主墓前に香火を奠すへきを以てす某其言の如くし還て之  
を復命す師は首肯微笑して又言ふ能はず幾はくもなくして瞑す

抒情詩はその焦點で白く燃えます。謙道師臨終の此情景に、人間の詩は此焦

點で涼しく燃えて、かの妙梵音聲の四方に響くを感じます。人間の詩は、神の佛  
の、大自然の、不滅の生命の中から發し、又その中で鳴り響いて、其處に聽手の魂を  
引く。其處には常に十五夜の月も懸り、落葉も、光を放つて鳴ります。  
赤心を以て、灼熱したる生命の威力を以て、天上を開き、人界を開く時に、自ら現  
れ出づるものが人間の詩なり、——此考へを以て私は謙道師の生活の詩の跡を  
語りました。

謙道師が出家して、落葉と共に、十五夜の月と共に、天上を開くの觀がありまし  
た時、其れと並んで、同じく赤心を以て、灼熱したる生命の威力を以て、人界を開き、  
人間の詩を明らかに示した人、同師の妻繁女（今年九十七歳）の事をも看過する  
ことは出来ません。同女の略傳は前述の「遠城謙道傳」の終に附記してありま  
すので、其れを其儘此處で讀んでみようと思ひます。

一たび死を決し二たび義に仗り妻子の恩愛を棄て、身を禪門に投し一



生掃墓の役に服す固より謙道師の本懐にして寧ろ其跡を高潔にし其節を全くするものと謂ふへし其配繁子は是時年纔に二十九今や所天に生別の悲を見塵祿沒收の痛に遭ひ家に財蓄の裕あるにあらず而も膝下に六人の子女を擁す苦心是時より慘澹なるはなし

人情の恃むへからざる世事の測るへからざる繁子は獨り心に決する所あるも幼稚なる子女は一家の不幸と慈母の心事を解せず己の欲する所は之を求め他人を見ては之を羨む繁子は毎に訓戒を加へ陽に叱責すと雖心陰かに其不遇を憫み日に暗涙を澱かさることなし其年十二月一女を分娩す爾來時運日に否にして米價益騰貴し斗米金一兩以上に直するに至る是時に當て母子八人の口を糊するは假令日夜賃鍼を是勉むと雖到底一女子の得て支ふへき所にあらず多からざるの家財を鬻き志士仁人の扶助を得て僅に露命を繋ぐのみ此悲境に沈淪して夢寐經過すること三裘葛明治元年出格に依り嗣子兵造の家名相續を許され俸米を賜ふ因て少しく愁眉を

伸ることを得たりと雖家計の窮困依然として前日に減せず憂患の餘遂に病をなす一日突然吐血し日に重症に赴き殆んと起たす子女は枕頭に環坐し常に湯藥に侍し晝夜旁らを離れず時に故舊鄰保の救援を得て僅に奉養看護を怠らす天豈此貞烈可憐の寡孤を恤まさらんや數月にして漸く春を回すに至る兵造は既に藩校に上して學に就かしめ女は鍼線を學はしむ繁子獨り薪水の勞を取り或は人の爲めに澣濯裁縫し夜は孤燈の下に子女を集めて勤學せしむ此の如くすること七八年八年の春に至り家計益左す繁子謂へらく假令一女子と雖所天の迹を辱かしむるは我が慚つる所坐して此悲痛の淵に沈んよりは寧ろ身勞役に服し開運の時を待つに如かず幸に兒女稍長して其羈絆を脱するを以て親族等に謀り斷然家を閉し他郷に出稼して一家各自活の道を求むることに決議す時に繁子年三十九是より先き一女既に亡し長女は人に嫁し次男末女は他に行き長男兵造は笈を負て東京に苦學す繁子は女子二人を携て故郷を辭し上野富岡製絲場の工女に



出願す時に尾高忠惇澁澤一ノ兄社長たり遠城一家の忠貞を聞き繁子の來を喜  
ひ直に擢して工女取締の任を託す時に工女を使役すること六百餘人繁子  
は深く尾高氏の遇知に感じ勤務に服するに誠實と勉強を以てし未だ嘗て  
一日も怠ることなし十三年夏製絲所内室扶斯病大に流行し勢甚猖獗を極  
め翌年春に渉る工女病に臥するもの一時七十餘人繁子をして病室看護の  
取締を兼ねしむ繁子は危険と勤苦とを省みず日夜碎身看護至らざるなし  
時の所長河村省記大に之を賞す兵造學稍進む舊主井伊公學資補助の恩命  
あり繁子は勞役して得る所の工錢を割て學資に充つ兵造初めて醫を大學  
に修むることを得たり籠手田滋賀縣令嘗て富岡製絲所に臨み繁子の事を  
聞き特に面して其貞操を賞す十五年冬兵造は醫科大學の業を卒へ佐賀縣  
唐津公立病院長に聘せられ後東京に在て開業す抑繁子は堅忍不拔の節を  
以て夙に辛酸を嘗め盡し一家傾覆の日に當り隻手七子の鞠育に任し他郷  
に勞働すること九年の久しき能く其職を盡し嗣子をして其志を成さしめ

所天の清跡を汚さず其貞其勤實に女子の龜鑑にして其夫の忠節と双美と  
稱すへし茲に至て製絲所を辭し今や東京に在て家庭團樂の樂を遂ぐるこ  
とを得たり豈至誠の天に通ずるものにあらすや

「遠城謙道傳」に附いて居ります繁女の傳は之れで全部になつて居ります。

私は謙道師が天上を開いて人間の詩を現すやうに見えました時、繁女は人界を  
開いて同じく人間の詩を明らかに示したと言ひました。彼女が捨身となつて  
娑婆世界の中に留り、封じられた道を押切り、閉された道を押破り、突き進んだそ  
の處に、白熱したその生命の威力に明けてほのく、と白み行く美しき生活の國、  
——それこそ人間の詩の國、淨と美とに廣々とひろがる人間の詩の國です。至  
誠は即ち至上の力、天の覆ひも之れで破れ、地の底も之れで破れる。天の覆ひも  
地の底も破れた時に始めて見える一如の世界、光明世界が、生命の花を咲かす時  
に、其處に人間の詩も生れる。その力を得て自由自在に世の中を濶歩する、——  
之れが人間の詩の妙用です。



私は繰返して申します、「赤心を以て、灼熱したる生命の威力を以て、天上を開き、人界を開く時に自ら現れ出づるものが人間の詩なり」。

謙道師はあの灼熱した、眞白に燃え上つた力を以て、天の覆ひを衝き破つて、淨土を其處に現した。繁女はその燃え上つた力を以て、人間世界の底を破り、尊い世界を開拓した。茲に天地の覆ひなく底のない一つの世界、たゞ一つの尊い世界、たゞ一つの美しい世界、たゞ一つの明らかな世界は吾々に現れて、吾々のものともなつて見えます。世に詩人と呼ばれる人は澤山あります、けれども人間の詩を見る爲には、所謂詩人といふものを俟つまでもない。人間の詩は人が至誠を現す時に、人が至誠に動く時に、天地の眞に呼應する時に、何時何處にても見られます。私が呼んで人間の詩といふものを謙道師に就き繁女に就いて今語つて來ましたのも、此力に觸れてゝす。此話を聽いて少しでも心を動す人がありましたらば、其人の持つ人間の詩が其れに共鳴して居るのです。その眞に觸れて見れば、男も、女も、老人も、若者も、皆悉く詩人です、即ち世に詩人ならぬ者はない

のです。人間の詩は實に尊い。之れが大聖の金口となつては經ともなつて現れます。文藝の修業も要はこの人間の詩の開拓にあるのです。其れに就いても尙少しく申して置きたい。

本年九月には十三日から二十日まで東京日本橋の三越本店に都新聞社主催で「劇聖團十郎三十年記念展覽會」といふものがありました。其處にはありし日の此名優を偲ばせる同優記念の遺物が實に能く集められ並べられてありました。其會場の正面祭壇に隣して實物大とも思はれる「茅ヶ崎別荘孤松庵居室の寫し」までもある程の念の入れ方です。私も其會場へ參つて見ましたが、這入ると直ぐ私を引き附けてしまつた同優の見事な書がありました、其れは大きく隸書で書いてあつた一つの詩です。

順逆無二門。 大道徹心源。 五十五年夢。 覺來歸一元。

さうして、「第九年十一月演劇市川團十郎書」と記してありまして、押印してあり



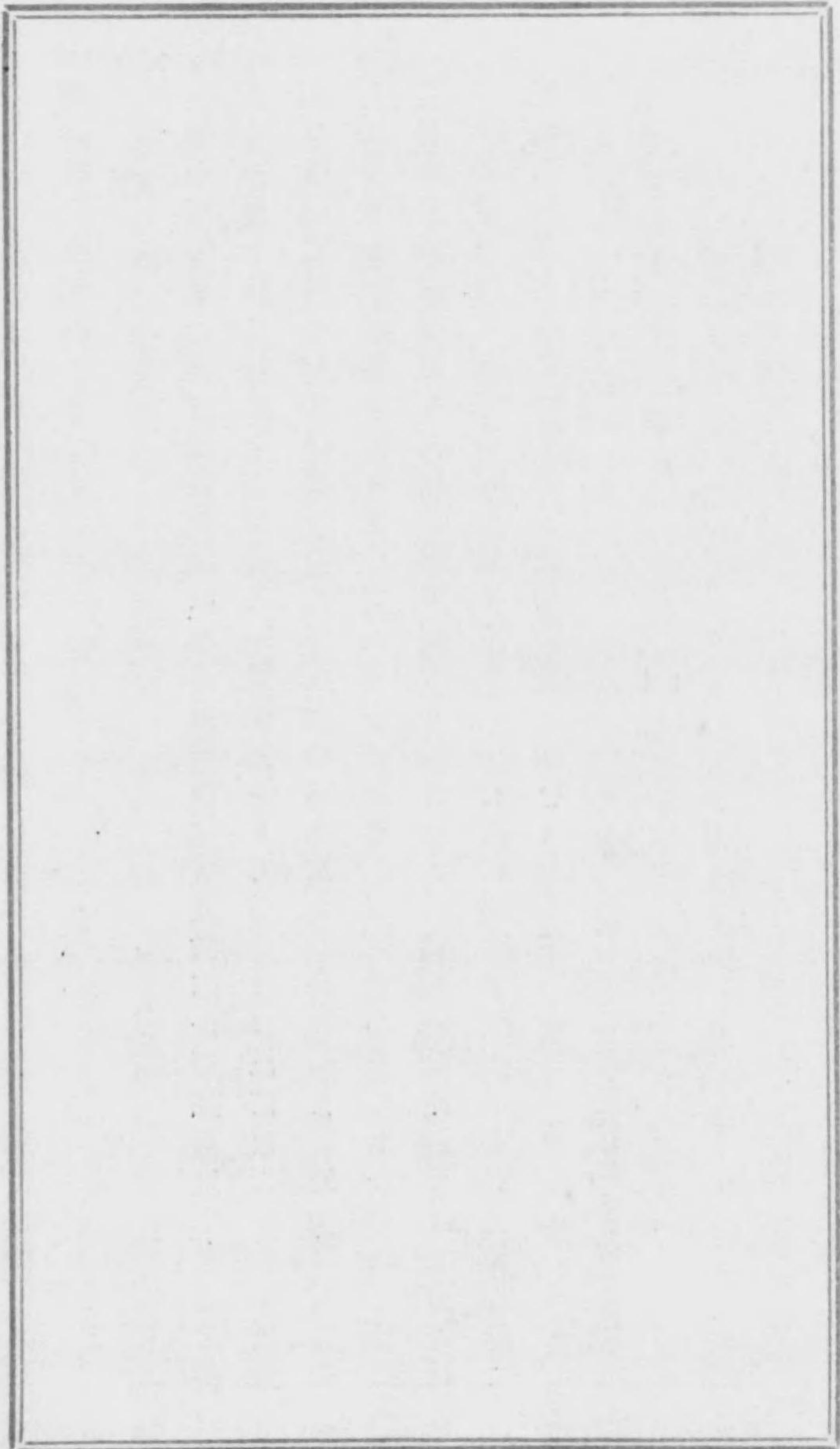
ます。其れには又「順逆無二門の詩(九世市川團十郎武智光秀役にて書きし詩)」といふ出品者の説明書がありました。主を殺した逆臣武智光秀(明智光秀)の役柄で認められた順逆無二門の詩、母親を假令誤つてとは云ひながら竹槍で突き殺した武智の役の中での此詩、私は成程と感じました。「順逆二門なし」——正しい道であるとか、邪な道であるとか云つたとて、二つの門があるのではない。「大道心源に徹す」——大きな道が唯一本心の源へ徹つてゐる。「五十五年の夢、覺め來れば一元に歸す」。神の道に二つはなく、佛の道に二つはなく、目覺めた道に二つはない。淨を究め、美を極め、かの十五夜の明月が我が住む里となつた時、風がもて來る落葉の自在が我が身の姿となつた時、順に從へば順を美化し、逆に從へば逆を淨化し、人に順逆の影はあつても、曼陀羅の圖其儘に舞台は一如の淨國に收まる。九代目市川團十郎に此一元が覺めたればこそ彼れに劇聖の名も下される。妙技は聖に通じ、聖は一元の目覺めに通じ、人間の詩も此處に榮える。何處に腰を下さうとも、我が坐るべき蒲團は一枚、その一枚の尊きものを持つことが「人

間の詩」を知ることです。

團十郎の藝の冴えは、藝の誇は、藝の妙味は、遠城謙道師が至誠を以て先主の掃墓に一生を投じた妙味と、其處に一脈相通するものがなければならぬ。謙道師は落葉に歸り一本の箒を持つて人間の詩を高らかに歌つた。繁女は人力の凡てを盡し生活苦の底を破つて人間の詩を高らかに歌つた。團十郎は一元に目覺めた妙技を以て人間の詩を高らかに歌つた。釋尊も其他の聖者も皆それ／＼の姿を以て人間の詩を師子吼した。心源に徹する大道をこの人間の詩に見出し、無常迅速の中に於て夜明の歌を歌ひませう。

(昭和七年十月十六日信道會館講演)





昭和八年十月七日印刷  
昭和八年十月十日發行

創立 明治二十四年  
信 道 會 館

發行人 財團法人  
信 道 會 館

印刷所 名古屋市中區千早町五丁目  
一 誠 社

發行所 名古屋市中區府伏見町二丁目  
信 道 會 館

電 本 三〇七二番  
郵 〇座 名古屋 一一二四番



終

